

# 松蔭 校長室だより

2018年 12月 3日 発行

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

松蔭中学校・高等学校  
校長 浅井宣光

善人過ぎるな、賢過ぎるな。どうして滅びてよかろう。悪事を過ごすな、愚か過ぎるな。どうして時も来ないのに死んでよかろう。一つのことをつかむのはよいが、ほかのことからも手を放してはいけない。神を畏れ敬えばどちらをも成し遂げることができる。  
(コヘレトの言葉 7:16~18)

## 2 学期の活動から

中間考査終了後、修学旅行やら校外学習、次年度の科目登録など慌ただしかった秋も12月を迎えると、ようやく一段落といったところでしょうか。校内ではクリスマスの準備が始まり、ツリーにリース、キリスト誕生の場面を描く人形のプレセピオ設置などが続いているところです。

先月10日にはバザーを開催しました。天候にも恵まれ、1100名を超えるお客様をお迎えしました。高校生はカレーや唐揚げにチジミなどの売店、中3生はゲームコーナー、中1、中2生は学年ごとに寄付先展示や箸の販売、校内清掃等に取り組みました。千と勢会（同窓会）やPTA、PTAのOG役員の方々による売店や喫茶コーナー、神戸松蔭女子学院大学の学生による小物販売もあり、まさに「オール松蔭」のイベントとなりました。ご協力いただきました皆様には、紙面を借りて感謝申しあげます。松蔭バザーは大正時代に始まりました。学校が神戸市中央区中山手通（兵庫県庁の北方）にあった頃のことです。当時は、校舎修築や新校地購入の資金を得ることを目的とし、入場料も徴収していました。現校地へ移転後は、学校に必要な備品の購入などを目的として、図書館の書籍や理科室の実験器具購入、クラブの部室やテニスコート、グラウンドの整備の費用がバザー収益によってまかなわれました。現在のバザーは、PTAや千と勢会の皆さんの売店の収益は、生徒活動のためにと学校に寄付していただいています。生徒が運営する売店の収益については、その全額を寄付することになっています。今回の収益金531,048円は、各クラスでの討議を経て集約した結果、8割を「保護犬保護猫カフェ」「わんにゃんプロジェクト」「日本赤十字社」に、残り2割を生徒が奉仕活動を行っている特別養護老人ホームきしろ荘、真生乳児院を運営する神戸真生塾、パン販売の「にじ作業所」に寄付することになっています。奉仕の精神を形に表わす、チャリティー活動である松蔭バザー。学校での活動ですから、学ぶという意味合いを含めて「サービスマーケティング」としてのバザーである、との言い方が適切かもしれません。理念を実践する意義深い1日となりました。

クラブ活動では、アーチェリー部が兵庫県高等学校新人戦で団体優勝したほか、各部が新人大会で活躍しています。文化部では、コーラス部が、元高校球児たちの野球大会「マスターズ甲子園」に協力していますが、今年も大会歌「栄冠は君に輝く」を甲子園球場で斉唱しました。他の部もチャペルコンサートを開催するなど、各部が多岐にわたって活動していました。

全校読書運動は今年で49回目を数える、半世紀近くの歴史を誇る伝統行事となっています。各学年ごとの「ポップ」やしおり作りの取り組みのほか、校内読書感想文コンクールが行われました。優秀作品については、兵庫県私学読書感想文コンクールでも審査され、次の皆さんが入選しています。

中学の部	特選 「ガラスのうさぎ」を読んで	1年	西田祐月
	入選 「Little DJ」を読んで	2年	中島与喜子
	入選 「サクラ咲く」を読んで	3年	福永陽菜
高校の部	入選 飼育するという命の責任	1年	波部日葵
	特選 自分であること	2年	川島利奈
	入選 自分との戦い	3年	中山葉月

正面玄関のロータリー北側にはつい先日まで、美術部が昨年参加した現代美術のコンテスト「六甲ミーツ・アート」のグランプリ受賞作品「六甲ハイ、チーズ」が展示されていました。今年も続いて出展することになり、作品『それゆけ！てんしろくん』がオーディエンス大賞を受賞しました。「てんしろくん」の天使の輪を、観覧者と美術部員と一緒に作り上げる参加型パフォーマンスの様子は、ホームページに製作レポートとして掲載中です。右の写真は中1から高3までの部員の皆さんと顧問の宮崎先生が校長室に報告に来てくれた時のものです。部員以外にも製作に関わった生徒も一緒に来てくれました。やりがいある活動だったと、達成感のある素敵な表情を見せてくれていました。



<「てんしろくん」製作スタッフの皆さん>

高2コースⅡの生徒対象に、選択科目として大学特講（神戸松蔭女子学院大学教員による講座）が設定されていますが、10月末からの6回にわたってはグローバル教育講座と銘打ち、フランス語、中国語、韓国語の中から希望する講座を受けています。フランス語は1クラス、中国・韓国語はそれぞれ2クラスを開講していますが、韓国語受講者が多いのは、姉妹校の信明高校、聖明女子中学校との交流によるところが大きいようです。中国語学習については、ヨーロッパやアフリカ諸国など世界各地で人気が高まっていますが、本校でも中国語圏の国々の学校との国際交流プログラムを作りたいと考えています。

English Roomでは平日の昼休みと放課後、オーストラリアのシェーン先生、米国のリーチ先生、韓国のシャロン先生がシフトを組んで在室し、シャロン先生は韓国語会話でもOKとのことです。先日は「英語で折り紙」講座が開かれていました。毎日昼休みと放課後に開室していますので、まだ少し勇気が足りない、という生徒も「耳だけレッスン」であっても入室してほしいものです。

2学期は、生徒、教職員ともにオーバーワーク気味に走り続けてきたように感じています。『いっさいは空である』の一節から始まる旧約聖書「コヘレトの言葉」は、聖書のなかでは異彩を放っていると評されています。一息ついていきますと、冒頭の聖句が心に留まりました。（裏面に続く）

## 大阪・関西万博の開催決定を機会に考えたいこと

先月末、2025年の大阪・関西万博の開催が正式に決まりました。大阪湾岸の舞洲（まいしま）を会場に、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとし、「多様で心身ともに健康な生き方、持続可能な社会・経済システム」の見本市を開催する、という政府のコンセプトが発表されています。人工知能（AI）や仮想現実（VR）などを体験できる「最先端技術の実験場」は、世界150カ国の参加を予測し、2025年5月3日～11月3日の6か月間開催されるそうです。

人類の知恵と文明の祭典とも称される博覧会は、18世紀末頃のヨーロッパ各地で開催されるようになりました。当時は各国が国力を誇示するねらいもあったようです。1855年、フランス政府主催の第1回万国博覧会がパリで開かれ、その後8回にわたってこの地で開かれました。その後は世界各国で開催されるようになり、日本各地でも様々な博覧会が行われました。関西では1981年の「ポートピア」が神戸ポートアイランドで、1990年には「大阪花博」、2000年には「淡路花博」が開催されました。国際博覧会としての万博が大阪で開催されるのは、1970年「EXPO'70大阪万博」以来55年ぶり2回目となります。

近年の万博は自然環境の保護を第一とし、いのちや暮らし、自然との共生などを目標に掲げることが多いようです。2015年のイタリア・ミラノ万博は「地球に食料を、生命にエネルギーを」をテーマに、飢餓や食料安全保障、生物多様性の理念を訴えました。2020年の東京オリンピック・パラリンピックの閉幕1か月後には、中東のアラブ首長国連邦・ドバイ万博が開催される予定です。テーマの1つに環境問題があり、キーワードとして「Sustainability（持続可能性）、climate change（気候変動）、Natural Ecosystems and Biodiversity（自然生態系と生物多様性）、Green Economy（グリーン経済）」があげられています。グリーン経済は、環境に優しい経済のことで、持続可能な開発・発展を実現する経済のあり方を意味します。

ミラノ、ドバイに続く大阪・関西万博もこの方向性のなかにあります。万博誘致委員会のホームページを見ると、開催目的として次の2点が掲げられています。

**「国連が掲げる持続可能な開発目標（SDGs）が達成される社会」「Society5.0の実現」**

SDGsとSociety5.0の実現を目標としていますが、この2つの用語は、生徒の皆さんにも今回の万博開催の決定をきっかけとして、ぜひ理解しておいてほしい事柄です。

### 探究型授業とSDGs（エスディーゼズ）、Society5.0（ソサエティゴーテンゼロ）

私学も公教育を担う機関として位置付けられていますから、今後の学習指導要領の改訂に対応する必要があります。高校は2022年から年次進行、中学は2021年度一斉改定、小学校は2020年度改定で「英語」の教科化などが決まっており、すでに移行措置として先行実施されている内容もあります。現高1学年からの大学入試改革、新センター方式の実施もこの一環です。今回の改訂では、授業科目名には「探究」という名称の教科が増え、様々なテーマについて自分としてはどのように考え、どのように行動するのか。そして自分の意見を人にどのように伝えるか、といったこれまでとは異なる学びの方法を、一人ひとりに身に付けさせることになっています。従来の学校教育は知識量を問うことが主でしたが、これからは知識を得るとともにそれを使って思考し、判断して自分の意見を発信できるようになることに重点が置かれます。

SDGsもSociety5.0も、今後の学校教育のなかに積極的に関わりを持たせるようにプログラムを組み、10年後の生徒の将来に生かすべきだと考えています。

SDGs（持続可能な開発目標）は、2015年に国連で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に定められた2030年までの国際目標です。17項目の目標が設定され、「貧困をなくす」「飢餓をゼロに」といった発展途上国の課題から、「働きがいも経済成長も」「住み続けられる街づくり」といった先進国の課題、さらに「気候変動に具体的な対策を」「海の豊かさを守ろう」など地球環境やその保全に関わるものなど多岐にわたります。環境問題の目標は、本校のBlue Earth Projectの取り組みが目指す目標と合致しています。“Leave no one behind”（地球の誰一人として取り残さない）を訴え、地球上の全ての国家が取り組むユニバーサル（普遍的）なものとして国内外で積極的に取り組みが始まっています。SDGsが定める目標である様々な問題は、一人ひとりの生徒が将来必ず直面することとして、それに対処し乗り越える力を持つ女性の育成が、松蔭の課題であると思います。

Society5.0は、内閣府ホームページによると国家戦略として以下のように解説されています。「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会（Society）。狩猟社会（Society1.0）農耕社会（Society 2.0）工業社会（Society 3.0）情報社会（Society4.0）に続く、新たな社会を指すもので、第5期科学技術基本計画において我が国が目指すべき未来社会の姿として初めて提唱されました。」

説明を読むだけでは何のことか具体的なイメージがわきにくいのですが、次のように理解できます。日本は、高度成長による工業社会（Society3.0）を経て、現在、情報社会（Society4.0）の段階にある。しかし人口減少と少子高齢化、地方の過疎化と都市一極集中、環境やエネルギーなど現在の社会が直面している諸問題が生じている実状がある。そこで、AI（人工知能）やIoT（物のインターネット。通信機器だけでなく様々な物にインターネット通信機能を持たせて自動制御や遠隔操作などコントロールすること）など新しい技術を全面的に駆使して問題を解決し、次の段階の社会を目指していこう、というものです。

AIの導入は学校でもひろがりつつあります。本校の例をあげると、先月、高2の英語授業でインターネットを介したAIによる、スピーキング力評価を実施する実験的授業を行いました。英語のスピーキング力の評価は、客観性の観点から実施しにくいものですが、AIによる客観的な評価は、これまで学校には無かった評価法を導入することになり、教育においても新たな段階に入ります。

国家戦略としてのSociety5.0は産業界など様々な思惑が働いている側面は否めないでしょう。しかし、企業や行政、そして社会がこの方向に向かおうとしていることを理解し、自分がどのように関わることになるのか、関わりとしたらどのような知識・技能が求められるのか、自分や家族の生活はどのように変わるのか等々、10年後の未来を考える取り組みは重要です。

2025年の万博では、現松蔭生が中高を卒業して大学生や社会人となり、そのなかの多くがスタッフやボランティアとして関わっている姿を想像しています。臆することなく、世界の人々と人類の課題について英語で語り合っている姿です。